

令和6年 8月1日	農作物病虫害発生予報 8月	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
--------------	--------------------------------	----------------------------

～目 次～

I 予報の概要	1
II 予報	
【主要病虫害】	2
【その他の病虫害】	16
III 参考(予報の見方、気象予報)	17

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イネ	いもち病(穂いもち)	平年並	—	—
	紋枯病	やや多	やや多	少
	ごま葉枯病	平年並	平年並	前年並
	セジロウンカ	やや少	やや少	前年並
	トビイロウンカ	平年並	平年並	前年並
	コブノメイガ	平年並	平年並	少
	斑点米カメムシ類	多	多	前年並
ダイズ	ハスモンヨトウ	やや多	やや多	前年並
カンキツ	かいよう病	多	多	多
	黒点病	やや少	やや少	少
	ミカンハダニ	やや多	やや多	多
ナシ	黒斑病	多	多	多
	黒星病	やや少	やや少	少
	ハダニ類	平年並	平年並	少
果樹全般(モモ、ナシ、リンゴ)	カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)	多	多	多

お問い合わせ先
 TEL (0835) 28-1211(代)
 FAX (0835) 38-4115
 E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

Ⅱ 予報

【主要病害虫】

イ ネ

1 いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容

予想発生量	防除時期
平年並	粉剤・液剤：穂ばらみ後期と穂揃期の2回 粒剤・パック剤：出穂前

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の調査では、葉いもち病の発生は発生ほ場率22.2%（平年22.7%）、発病株率10.5%（平年10.5%）、発病度2.6（平年2.8）で平年並であった（±）。

イ 7月下旬の巡回調査における病斑の最上位葉は1.8葉（平年2.6葉）であった（+）。

ウ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量はほぼ平年並、日照時間は平年並が多い（±）。

(3) 防除対策

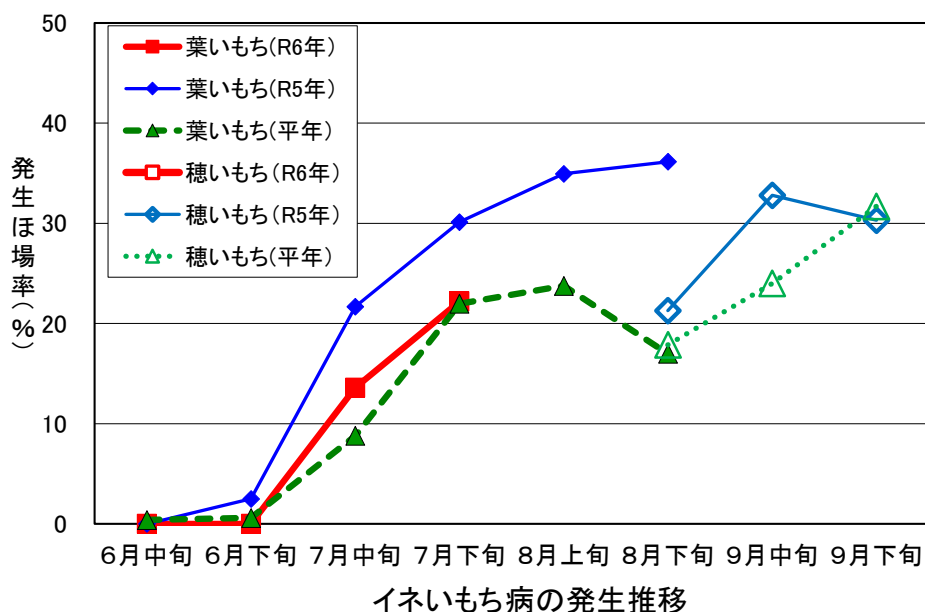
<耕種的防除>

窒素肥料の多用は避ける。

<防除のポイント>

ア 葉いもちが上位葉に発生しているほ場では、直ちに防除を行う。また、穂いもちの防除予定日まで7日以上ある場合（止葉抽出前）は、葉いもちの防除を行い、その後、穂いもちの防除を実施する。

イ 穂いもちの防除を適期に実施する。粉剤・液剤は穂ばらみ後期及び穂揃期の2回行い、粒剤・パック剤は出穂前に施用する。



2 紋枯病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	少	粉剤・液剤：穂ばらみ期（出穂14日前頃） 粒剤：出穂30日～10日前

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率4.9%（平年3.3%）、発病株率1.4%（平年0.3%）、発病度0.4（平年0.1）で平年に比べやや多かった（+）。

イ 気象予報では、8月の気温は高い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

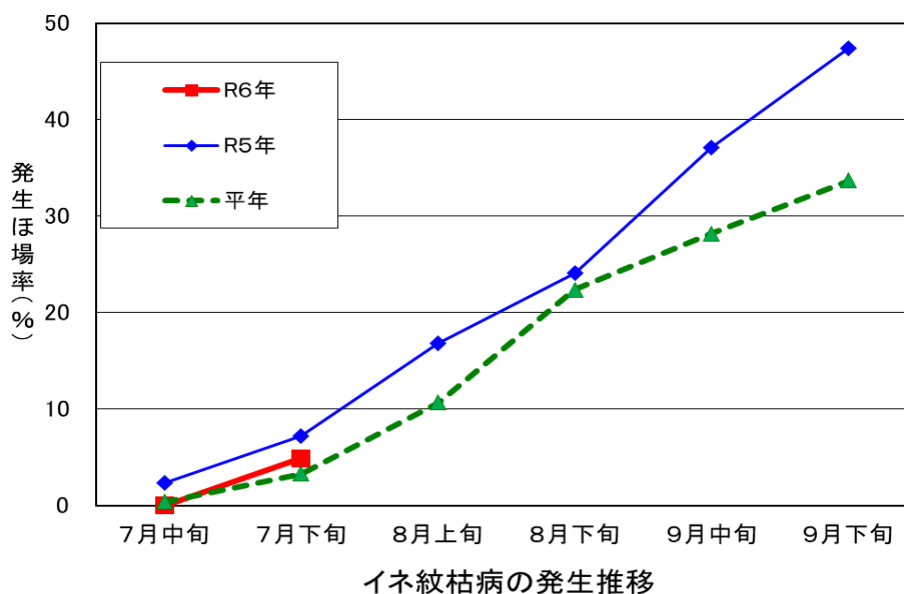
窒素肥料の多用は避ける。

<防除判断>

防除の目安は、穂ばらみ中期(出穂14日前頃) に発病株率が15～20%以上の場合に防除する。

<防除のポイント>

出穂期を過ぎると薬剤散布の効果が劣るので、適期防除に努める。また、株元まで十分に薬剤がかかるよう、ていねいに散布する。



3 ごま葉枯病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	穂いもちとの同時防除を行う

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率2.5%（平年4.0%）、発病株率0.9%（平年1.1%）、発病度0.2（平年0.3）で平年並みであった（±）。

イ 気象予報では、8月の気温は高い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

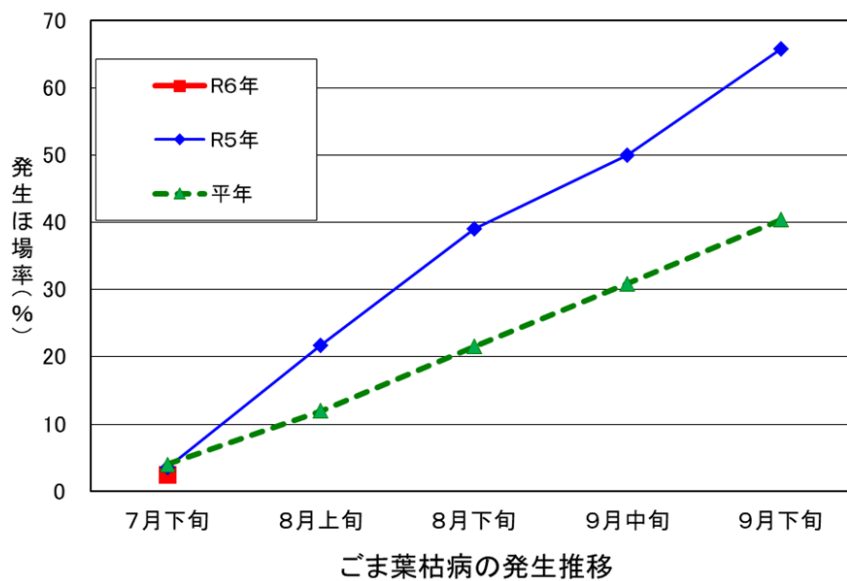
肥料切れは発病を助長するので、必要に応じて穂肥を施用する。

<防除判断>

発生状況に注意し、穂枯れを発生させないようにする。

<防除のポイント>

穂もちとの同時防除を基本とし、ごま葉枯病に適用のある剤を使用する。



4 セジロウンカ

令和6年7月8日付け令和6年度農作物病虫害発生予察技術資料第3号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22318.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	前年並	株当たり成幼虫50頭以上

(2) 予報の根拠

ア 5月11日～7月23日の予察灯（県内3か所）における誘殺数は1,928頭（平年111頭）で平年に比べ多かった（+）。

イ 下旬の巡回調査では、発生ほ場率39.5%（平年54.3%）、10株当たり虫数0.5頭（平年10.8頭）で平年に比べやや少なかった（-）。

ウ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量はほぼ平年並（+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

穂ばらみ中期までに株当たり50頭以上（成幼虫）の多発生があれば、褐変穂を生じる可能性があるため薬剤防除を行う。

<防除のポイント>

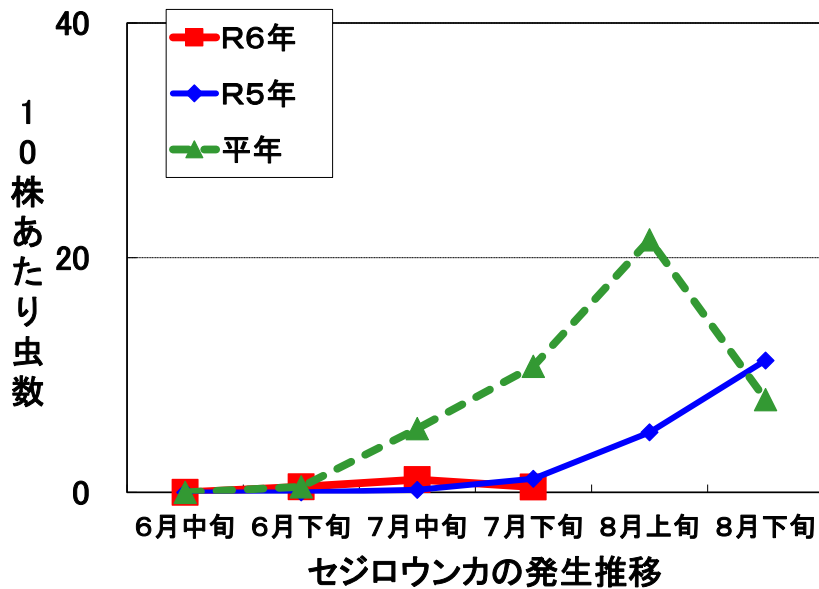
- ア 飼料用米では多発する場合がありますので注意する。
- イ 出穂した後のほ場では、防除の必要性は低い。

セジロウンカ		JPPネット有効積算温度シミュレーション											
		7月						8月					
飛来日	飛来量	5	10	15	20	25	30	5	10	15	20	25	30
6月22日	中	卵	第1世代幼虫	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫	卵	第3世代幼虫				
6月25日	多	卵	第1世代幼虫	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫	卵	第3世代幼虫				
7月1日	多	飛来成虫	卵	第1世代幼虫	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫	卵	第3世代幼虫			
7月10日	多		飛来成虫	卵	第1世代幼虫	第1世代成虫	卵	第2世代幼虫	第2世代成虫				

■: 防除適期

7月17日現在

セジロウンカの防除適期予測図



5 トビイロウンカ

令和6年7月8日付け令和6年度農作物病虫害発生予察技術資料第3号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22318.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	8月上旬までは成幼虫100株当たり20頭以上 8月中旬～9月上旬は株当たり成幼虫5頭以上

(2) 予報の根拠

- ア 5月11日～7月23日の予察灯（県内3か所）における誘殺数は2頭（平年2.0頭）で、平年に比べやや多かった（+）。
- イ 下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%（平年6.3%）、10株当たり虫数0頭（平年0.2頭）で平年並みであった（±）。
- ウ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量はほぼ平年並（+）。

(3) 防除対策

<防除判断>

- ア ほ場の発生状況を確認し、防除の目安を超えていた場合は直ちに防除する。
- イ 防除の目安は、8月上旬までは成幼虫100株当たり20頭以上、8月中旬～9月上旬は株当たり成幼虫5頭以上である。
- ウ ほ場を確認する際には、ヒメトビウンカの幼虫と見誤らないようにする。

<防除のポイント>

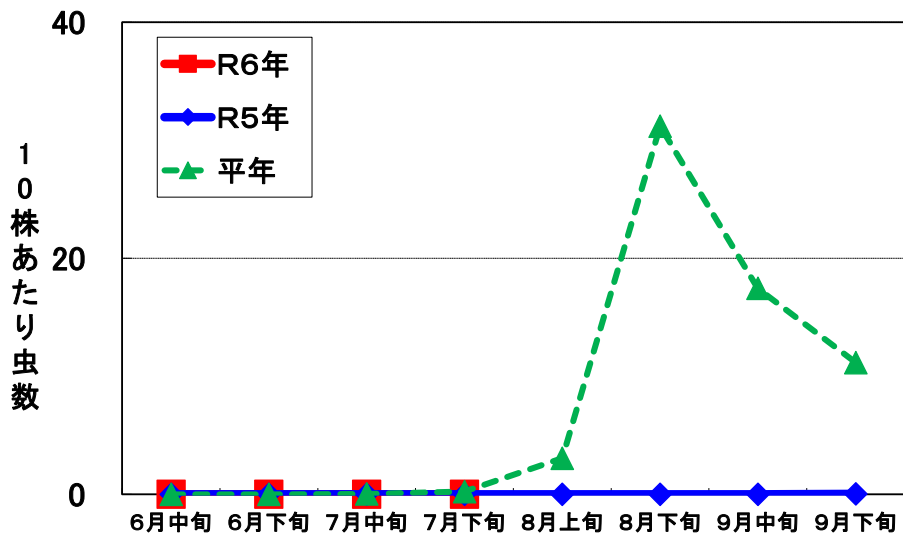
- ア 長期持続型箱施用剤を施用したほ場でも発生状況をよく確認する。
- イ 薬剤が株元にかかるように、ていねいに散布する。

トビロウカ		JPPネット有効積算温度シミュレーション													
		7月						8月							
飛来日	飛来量	5	10	15	20	25	30	5	10	15	20	25	30		
6月22日	少	卵		第1世代幼虫		第1世代成虫		卵		第2世代幼虫		第2世代成虫		卵	
6月25日	少	飛来成虫		卵		第1世代幼虫		第1世代成虫		卵		第2世代幼虫		第2世代成虫	
7月1日	中	飛来成虫		卵		第1世代幼虫		第1世代成虫		卵		第2世代幼虫		第2世代成虫	
7月10日	少	飛来成虫		卵		第1世代幼虫		第1世代成虫		卵		第2世代幼虫		第2世代成虫	
7月19日	少	飛来成虫		卵		第1世代幼虫		第1世代成虫		卵		第2世代幼虫		第2世代成虫	

■:防除適期

7月31日現在

トビロウカの防除適期予測図



トビロウカの発生推移

<参考>



トビロウカ短翅成虫



トビロウカ幼虫



ヒメトビウンカ幼虫

6 コブノメイガ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	成虫の払い出しで1㎡当たり5頭以上

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率50.6%（平年22.7%）、被害株率4.5%（平年5.3%）、被害葉率0.1%（平年0.3%）、20回払い出し虫数は1.1頭（平年0.7頭）で平年並であった（±）。

イ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量はほぼ平年並（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

葉色の濃いイネに好んで飛来するため多肥を避ける。

<防除判断>

ア 成虫の払い出し調査で5頭/㎡以上であれば、若齢幼虫発生期に防除を実施する。

イ 減収が問題となるのは、出穂期に上位2葉の被害葉率が15%（株率80%程度に相当）以上とされている。

コブノメイガ

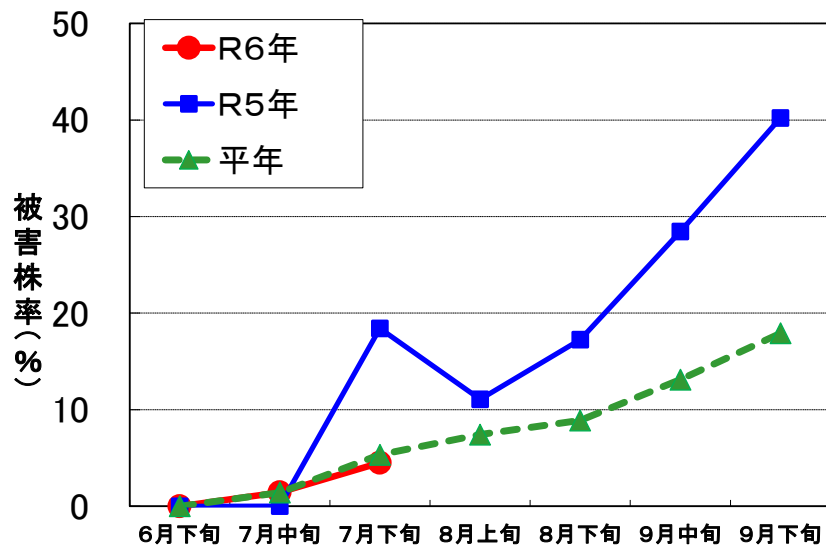
JPPネット有効積算温度シミュレーション

飛来日	飛来量	7月					8月				
		10	15	20	25	30	5	10	15	20	25
6月25日	少	第1世代幼虫					第2世代幼虫				
7月1日	少	第1世代幼虫					第2世代幼虫				
7月10日	中	第1世代幼虫					第2世代幼虫				
7月13日	中	第1世代幼虫					第2世代幼虫				
7月19日	中	第1世代幼虫					第2世代幼虫				

■: 防除適期

コブノメイガの防除適期予測図

7月31日現在



コブノメイガによる被害株率の推移

7 斑点米カメムシ類

令和6年7月17日付け令和6年度農作物病虫害発生予察注意報第2号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22328.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	前年並	穂揃期と穂揃期7日後の2回防除を徹底する(液剤の場合)

(2) 予報の根拠

ア 6月21日～7月20日の予察灯(県内3か所)における主要種の誘殺数は、7,169頭(平年1,219頭)で平年に比べ多かった(+)

イ 下旬の雑草地20回すくい取り調査では、86頭(平年126頭)で平年に比べやや少なかった(-)

ウ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量はほぼ平年並(+)

(3) 防除対策

<耕種的防除>

カメムシ類が増えるのを避けるため、出穂2週間前までに畦畔等の草刈りを実施し、それ以降もイネ科雑草(エノコログサ、メヒシバ、ヒエ等)の穂が出ないように管理するとより効果的である。なお、イネカメムシはイネ科雑草に寄生しないため、畦畔の草刈りを行ったほ場でも多発する可能性があるため注意する。

<防除のポイント>

ア 薬剤防除時期(液剤)

1) 穂揃期と穂揃期7日後

2) イネカメムシの発生が多い地域では、出穂期と出穂期7日後

イ 粒剤で防除を行う場合は、液剤より3～4日早く散布する。ただし、大型カメムシが多い場合は効果が劣るため、防除後の効果をよく確認する。

ウ 防除後、ほ場での発生状況を確認し、カメムシ類の発生が認められる場合はさらに7日後の追加防除を実施する。

表 予察灯における斑点米カメムシ類主要種の誘殺数(6月21日～7月20日、県内3か所合計)

年度	大型種			小型種		合計
	クモヘリカメムシ	イネカメムシ	ミナミアオカメムシ	アカスジカスミカメ	アカヒゲホソミドリカスミカメ	
令和6年	44	40	153	6245	687	7169
平年	14	8	14	1010	173	1219



クモヘリカメムシ成虫
(体長16mm程度)



イネカメムシ成虫
(体長16mm程度)



アカスジカスミカメ成虫
(体長5～6mm)

ダイズ

1 ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	前年並	若令幼虫最盛期

(2) 予報の根拠

ア 6月21日～7月20日のフェロモントラップ（県内5か所）の誘殺数は3,309頭（平年2,336頭）で平年に比べやや多かった（+）。

イ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量はほぼ平年並（+）。

(3) 防除対策

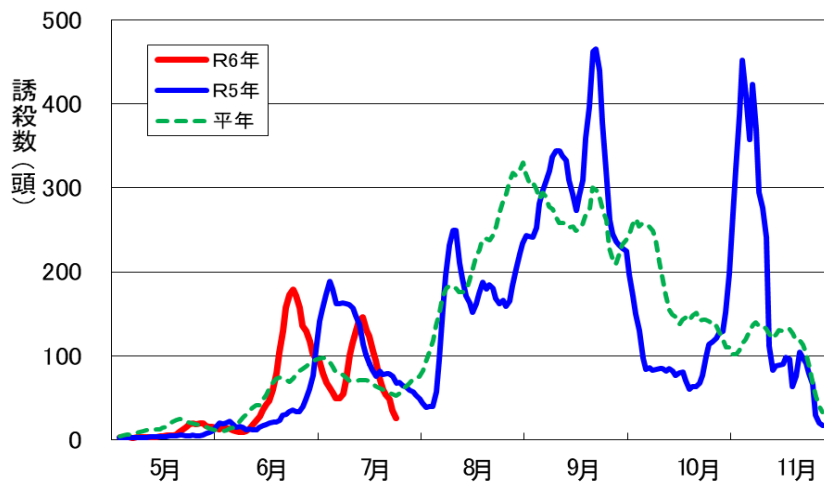
<防除判断>

防除の目安は、白変葉の発生か所数が1アール当たり5か所以上である。

<防除のポイント>

ア 中～老齢幼虫には薬剤の効果が劣るので、若齢幼虫期の防除を徹底する。

イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。



ハスモンヨトウ フェロモントラップ誘殺数（県内5か所合計）



大豆白変葉



ハスモンヨトウ（卵＋若齢幼虫）



ハスモンヨトウ（老齢幼虫）

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	台風の前

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率21.1%（平年8.1%）、発病果率3.1%（平年0.5%）、発病度1.4（平年0.5）で平年に比べ多かった（+）。

イ 気象予報では、8月の降水量はほぼ平年並み（±）。

(3) 防除対策

<防除判断>

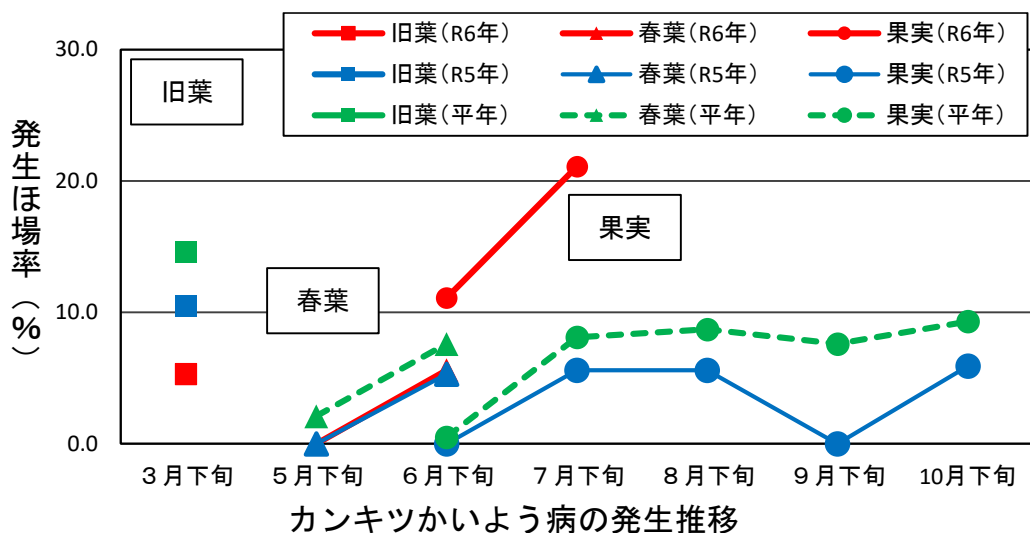
発生が見られるほ場や、あまなつ、南津海等発病しやすい品種では、台風の前前に防除を実施する。

<防除のポイント>

ア 病斑のある枝や葉は伝染源となるので除去する。

イ 防風樹や防風ネットを整備し、強風による感染を防ぐ。

ウ 夏秋梢はミカンハモグリガの被害が発生しやすく、本病の発生を助長するためできる限り除去する。幼木や隔年交互結実園の遊休樹など夏秋梢を残す場合にはミカンハモグリガの防除を徹底する。



2 黒点病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	防除後の累積降水量が200mmに達したとき、または薬剤散布後1か月を経過したとき

(2) 予報の根拠

ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率47.4% (平年61.6%)、発病果率6.7% (平年10.7%)、発病度2.3 (平年2.5) で平年に比べやや少なかった。(一)。

イ 気象予報では、8月の降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

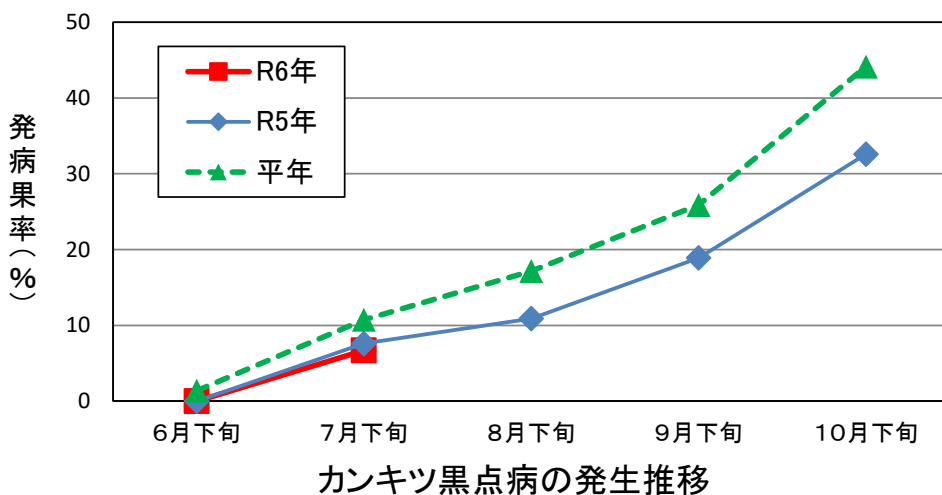
<防除判断>

予防散布が基本なので、予報内容の防除時期に合わせて防除を実施する。

<防除のポイント>

ア 樹冠内の枯れ枝や放置された剪定枝は本病の伝染源となるので、園外に持ち出して処分する。

イ 「せとみ」の黒点病は病斑が大きくなり、外観品質に及ぼす影響が大きいため、防除が遅れないように留意する。



3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	雌成虫の寄生葉率30~40%以上 または雌成虫1葉当たり0.5~1頭以上

(2) 予報の根拠

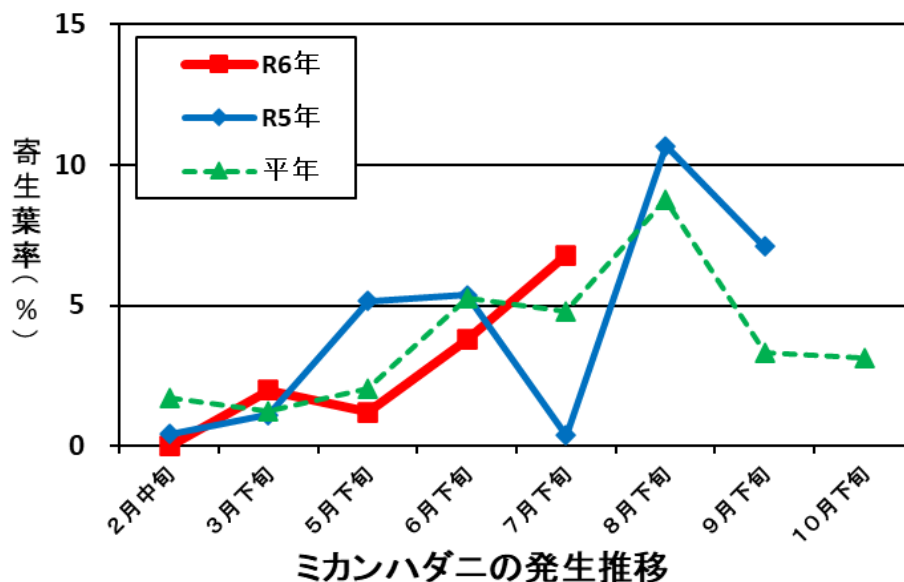
ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率47.4%(平年30.4%)、寄生葉率6.8%(平年4.8%)で平年に比べやや多かった(+)。

イ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量はほぼ平年並(-)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

発生量はほ場によって大きく異なる。定期的にはほ場を見回り、発生状況を確認する。



ナシ

1 黒斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	8月に2~3回の薬剤防除を行う。

(2) 予報の根拠

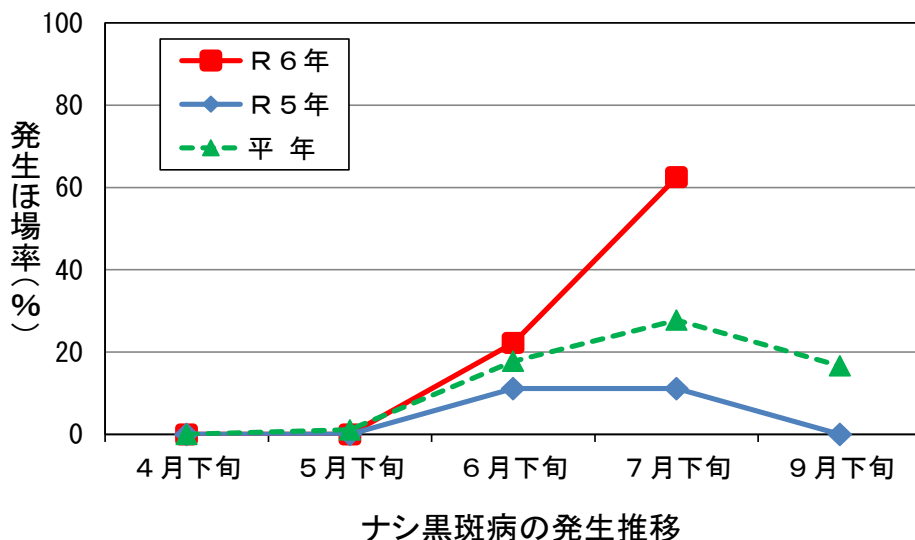
ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率62.5%(平年27.8%)、発病葉率1.0%(平年0.1%)、発病新梢率9.4%(平年1.3%)で平年に比べ多かった(+)

イ 気象予報では、8月の降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 薬液が新梢の先端まで十分かかるようていねいに散布する。
- イ 落下した果実は拾い集め、園外に持ち出し処分する。



2 黒星病

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	少	黒斑病、輪紋病と同時防除を行う。

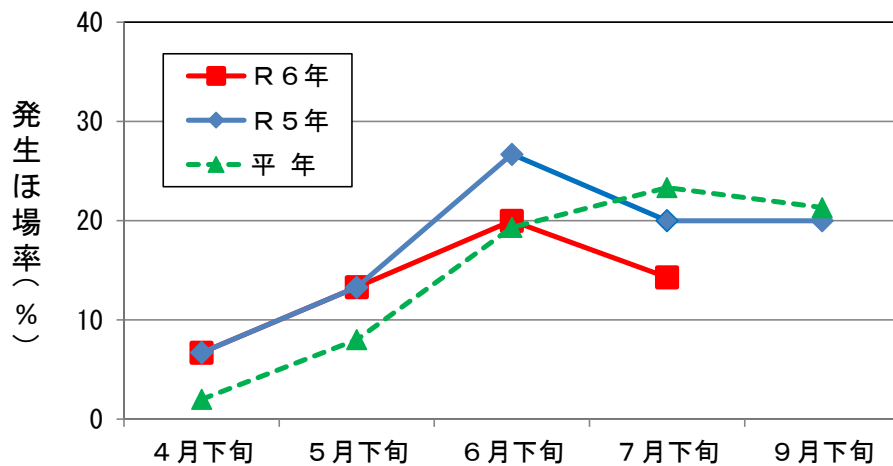
(2) 予報の根拠

- ア 7月下旬の巡回調査では、発生ほ場率14.3%(平年23.3%)、発病葉率1.1%(平年0.8%)で平年に比べやや少なかった(一)。
- イ 気象予報では、8月の降水量はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

- ア 発病した果実や葉は伝染源になるので、見つけ次第除去するとともに、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。
- イ 本病が発生している場合は、治療効果があるQoI剤(殺菌剤コード11:ストロビー、アミスター等)、SDHI剤(殺菌剤コード7:フルーツセイバー、パレード等)で直ちに防除を実施する。
- ウ 薬剤が果実と新梢にかかるよう、ていねいに散布する。
- エ 薬剤耐性の発達を防止するため、同一系統の薬剤を連用しない。
- オ ベンレート剤(殺菌剤コード1)、ルビゲン剤(殺菌剤コード3)では耐性菌が出現しているので、防除の後必ず防除効果を確認し、防除効果が劣る場合は、他剤を使用する。



ナシ黒星病の発生推移

3 ハダニ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率14.3%(平年18.0%)、寄生葉率1.3%(平年4.6%)で平年並みであった(±)。

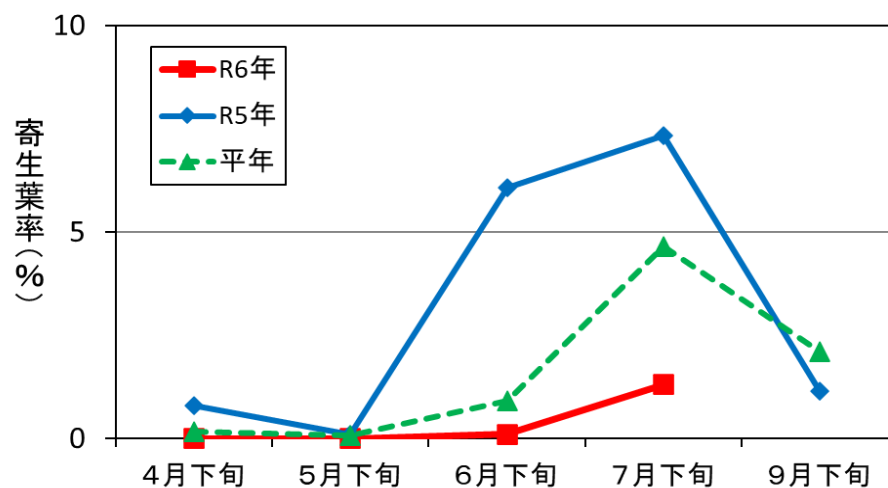
イ 気象予報では、8月の気温は高い、降水量はほぼ平年並(-)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

ア 乾燥期にハダニ類が多発すると早生種では葉焼けが助長され、早期の落葉を招くので、防除を徹底する。

イ 薬剤防除の際は収穫前日数に注意の上、かけむらがないよう十分な量でいねいに散布する。



ハダニ類の発生推移

果樹全般（モモ、ナシ、リンゴ）

1 カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）
 令和6年7月30日付け令和6年度病害虫発生予察技術資料第4号参照。
<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/122/22318.html>

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	園地への飛来を確認した時

(2) 予報の根拠

- ア 6月26日～7月25日の予察灯（県内4か所）の誘殺数は3,387頭（平年192.1頭で平年に比べ多かった（+）。
- イ 6月26日～7月25日のフェロモントラップ（県内4か所）によるチャバネアオカメムシの誘殺数は58,900頭（平年2,754頭）で平年に比べ多かった（+）。
- ウ スギ・ヒノキの毬果量調査（6か所、6月下旬調査）では、スギの着果程度は平年並み、ヒノキの着果程度は平年に比べ少なかった（+）。

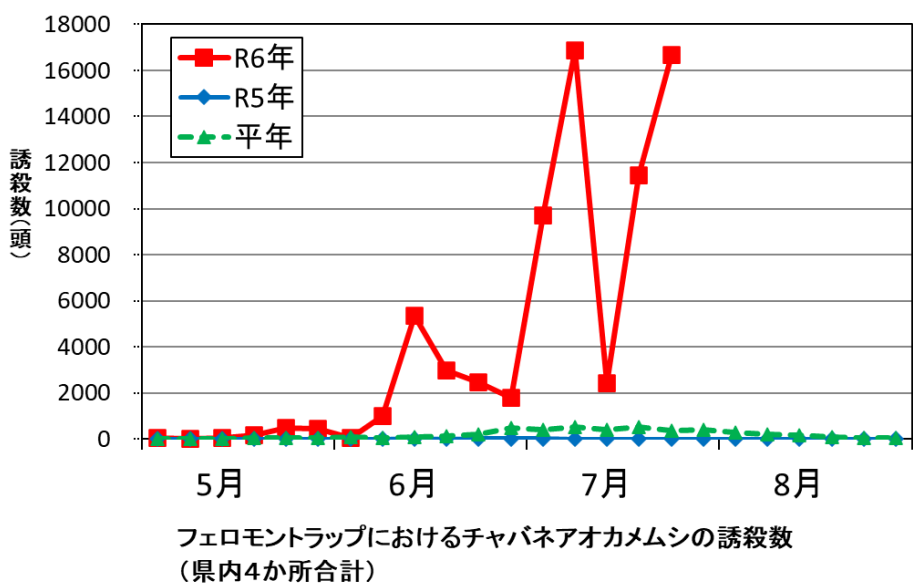
(3) 防除対策

<防除判断>

7月末から発生する新成虫の飛来時期や量は、地域や園地による差が大きいので、活動が活発になる夕方に園地や灯火を定期的に確認し、カメムシ類の飛来を把握する。

<防除のポイント>

- ア 無袋栽培園では、飛来を確認したら速やかに薬剤散布を行う。
- イ 有袋栽培であっても、果実の肥大に伴い袋に接して加害されやすくなるため、飛来を確認したら薬剤散布を行う。
- ウ カメムシ類に対する薬剤散布によって、ハダニが増殖する可能性があるため、発生状況に注意する。



【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予 想 発 生 量	現 況		発生ほ場率(%)		備 考
			平年比	前年比	本年	平年	
イネ	イチモンジセセリ	平年並	平年並	少	1.2	2.0	6月以降に移植した作型で、葉色の濃いほ場は被害を受けやすい。長期持続型箱施用剤を施用したほ場では防除の必要性は低い。
	ニカメイガ	平年並	平年並	前年並	0	0	
ダイズ	吸実性カメムシ類	多	多 (予察灯)	前年並 (予察灯)	—	—	
カンキツ	そうか病	多	多	多	42.1	5.1	病斑のある枝や葉は除去する。
	ミカンサビダニ	平年並	平年並	前年並	0	0.0	
	チャノキイロアザミウマ	平年並	平年並	少	5.3	8.7	
	ナシマルカイガラムシ	平年並	平年並	前年並	10.5	12.8	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	〃 より6日以上遅い
やや早い	〃 より3～5日早い
やや遅い	〃 より3～5日遅い
平年並	〃 を中心として前後2日以内

注：ウンカ類は1971年以降、コブノメイガは1985年以降の初確認日と比較

（ウンカは旬毎、コブノメイガは半旬毎）

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（7月25日福岡管区气象台発表）

予 報	低 い (%) 少 ない	平年並 (%)	高 い (%) 多 い
気 温	1 0	1 0	8 0
降 水 量	4 0	3 0	3 0
日 照 時 間	2 0	4 0	4 0

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	1 0	1 0	8 0
2 週 目	1 0	1 0	8 0
3～4 週 目	1 0	2 0	7 0